アメリカで散った若い命が日米の国際交流の懸け橋に

日下部太郎肖像
（福井市立郷土歴史博物館蔵）

開国を機に西洋の芸術・技術の導入が急務となった幕末。その時代に福井藩で初めて海外留学した青年が日下部太郎です。

日下部太郎は、弘化2（1845）年、福井城下に生まれました。勉強熱心な太郎は、通常なら15歳で入学する藩校「明道館」に13歳で入学。その後、21歳で長崎に遊学した後、慶応2（1866）年4月、留学を強く願い出ます。福井藩は、最初の藩費海外留学生として太郎をアメリカに渡航させることを決定しました。

慶応3（1867）年、太郎はニュージャージー州ニューブランズウイック市のラトガース大学で、W.E.グリフィス（後に、著書「皇国」でアメリカに日本を紹介）に出会います。2歳年上のグリフィスは、ラテン語の教師として、また、友人として太郎を支えます。グリフィスは、太郎の真剣に授業に臨む姿勢と真面目な人柄に尊敬の念を抱き、〝私は、彼に心密かに敬意を払い、深く日本の国風を憧れるにいたった〟と述べています。

留学中の日下部太郎（右）
（Rutgers Univ. Griffis Collection）

明治3（1870）年、太郎は卒業を前にして26歳の短い生涯を閉じますが、その年、グリフィスは福井藩から藩校明新館の講師として招かれます。招待状を受け取ったグリフィスは、悩んだ末に太郎の面影を思い浮かべ、「私の学んだ自然科学の知識や技術が、その国や国の人たちのために役立つなら、こんなに嬉しいことはない」と、福井行きを決意します。来日したグリフィスは、明新館で英語や物理、化学などを教えたほか、日本における当時最新の理科実験室を作りました。熱心で優しいグリフィスの人柄は、福井の人々に伝わり、慕われていたといいます。

太郎の死後、約100年後の昭和49（1974）年には、郷土史を勉強していた福井青年会議所のメンバーがラトガース大学に資料収集に訪れています。これらを契機に、昭和56（1981）年にラトガース大学と福井大学が姉妹大学に、昭和57（1982）年にニューブランズウィック市と福井市が姉妹都市に、平成2年にニュージャージー州と福井県が姉妹州県になっています。現在も、学生の相互派遣など、文化・教育面で交流が行われています。日下部太郎の高い志は、グリフィスの心を動かし、2つの地域をつなぐ懸け橋となったのです。

関連史料・ゆかりの地

足羽河畔に臨む日下部太郎とグリフィスの像

福井市中心部を流れる足羽川を眺めて静かに佇む日下部太郎とグリフィスの師弟像。福井市とニューブランズウィック市の姉妹都市提携20年を機に設置されました。二人の功績は、両地域の交流を深め、多くの人の記憶の中に留められています。

【住所】福井市中央3丁目幸橋北詰（JR福井駅より徒歩10分）

参考資料等　福井市立郷土歴史博物館編『よみがえる心のかけ橋・日下部太郎／W.E.グリフィス』

発行／福井県観光営業部ブランド営業課